

## シリーズ 私の一冊の本

生活健康科学研究科・食品栄養科学部 加治和彦 先生

### アリス・ウェクスラー著 『ウェクスラー家の選択:遺伝子診断と向きあった家族』

閲覧室 2 階 493.74/W 64 新潮社 出版

ハンチントン舞踏病は脳神経系を犯し死に至らしめる遺伝性の疾患である。多くは 50 後半に発病するため、その遺伝子を有していても子孫を残す時間がある。母親がハンチントン病を発症した時、30 代の女医のナンシーは姉（本書の著者）と相談し子供を産まないことにした。彼女らがハンチントン病の遺伝子を母から受け継いだ可能性は各々 50% である。彼女らは例えば料理中に卵をフライパンから誤って落としたりしたとき、ハンチントン病の始まりではないかと恐れおののいた。そのような死の影を恐れる日々が重なった後、ナンシーは自分達を苦しめる運命に立ち向かった。この遺伝病が猖獗を極めるベネズエラの寒村で血液を採取し、ハンチントン病の遺伝子が第 4 染色体短腕にあることを遂に特定した（遺伝子の狩人、ビショップ、化学同人、原著、1990）

しかし、真の苦しみはここから始まった。未来を見通せる水晶玉を手に入れてしまったのである。姉妹は遺伝子診断を受け、自分がその病気の遺伝子を持っているのか否かを知るべきか。著者と妹のナンシー、それと父親の心の葛藤を綴ったのが本書である。同じような立場の人たちのある者は遺伝子診断を受け、あるいは受けなかった。父親はその診断が確かではないとの理由から診断に反対した。結局・・・彼女たちは遺伝子診断を受けなかった。我々は様々なリスク遺伝子（高血圧、糖尿病、大腸癌 等々）を生まれながらに持っている。これをいち早く知ることにより、病気を予知し対処することができる（予知医学）。しかしそれが致死性の病を引き起こす遺伝子である場合は、それを知ることがその人にとって望ましいことであろうか。諸君ならばどうするか？

遺伝子が分かれば、次にその働きを明らかにすることができる。運命の正体が明らかになれば対処する手だても可能になる。実はそのためにこそ遺伝子を追いかけたのである。特にハンチントン病のように成人後期に発症する病気であれば、十分な時間もあり食品等で予防することも可能であろう。本書の出版からほぼ 10 年経った 2004 年にその手だてが見つかった。発病を抑える魔法の物質は、大福餅や生八つ橋などに添加されている、2 糖類トレハロース（Nature medicine, 10, 148-154, Tanaka, M. 等）であった！この吉報を本書の著者とナンシーはどのような感慨を持って聴いたであろうか。

本書は問う「君たちは遺伝子に—予知医学に—どのように立ち向かうのか」